インパラの涙

南　晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
インパラの涙

【Ｎコード】
Ｎ６２２０Ｎ

【作者名】
南　晶

【あらすじ】
高校時代の淡い恋のお話

第一話（前書き）

恋愛小説を書きたくて試行錯誤してます。
女性の方に共感してもらえたら嬉しいです。

第一話

まだ夏の日差しが肌を焼く9月の上旬。
新幹線のプラットホームに美紀は一人立っていた。
もうすぐ12時になろうとしている。
日差しがきつい。
暑さと湿気で肌がべたつく。
せっかくカールしてきた髪も萎びたわかめのようだ。
慣れないスカートも素足に巻きついて気持ちが悪い。
だが、胸が締め付けられるような興奮と緊張で美紀はそれどころではなかった。

「まもなく大阪行きひかり000系が到着します。白線の内側に・・・」

プラットホームにアナウンスが響いた。
美紀の胸の鼓動が早まる。
美紀はまだ姿の見えない新幹線を線路の彼方に探した。
やがてこちらに向かってくる新幹線が見え始め、その輪郭がはっきり見えてきた。
美紀は鼓動を落ち着かせるように深呼吸をして、白線の後ろに下がった。
記憶の中の6年前の夏は、新幹線を待つ美紀の脳裏に焼きついていた。

第2話

暑い夏だった。
もっとも冷夏と言われる年も、大体暑いと感じるものだが。
高校2年だった美紀は陸上部の練習を終え、夕暮れのグラウンドを歩いていた。
アブラゼミのこえが響いている。
泥だらけのシャツが体にべっとりまとわりついた。

水道水をゴクゴク喉を鳴らして飲む。
褐色に日焼けした顔を水道水で洗うついでに、ショートヘアの頭を突っ込みガシガシ洗った。
ふと視線を感じ、前を見ると金網の向こうでこちらを見つめる人影がいる。

「透？今帰り？」

美紀は汚れたシャツをまくってゴシゴシと顔を拭きながら聞いた。

「うん。一緒にかえろか。」

色の白い少年が近づいて来て金網ごしに言った。

色白で眼鏡をかけた透は優等生のお坊ちゃんに見える。
優等生なのは本当だったが、残念ながらお坊ちゃんではなかった。
同じ市営住宅の隣同士の部屋だった透と美紀は一人っ子同士だったこともあって兄妹のように付き合ってきた。
親同士も仲が良くよく家族ぐるみでバーベキューなんかしたものだ。
透の父親が突然会社で倒れてそのまま亡くなってからは、一緒に出

掛ける事は少なくなった。
透が中学校の時だった。
透の母親が家計を助ける為仕事に出始め、家事全般を透がするようになったから、遊びに行く暇が無くなってしまったのだ。
美紀の母はそんな透に、夕飯を作って美紀に届けさせたりしていた。

「焼けたな。前か後ろか分かんないよ。」
透が苦笑する。

「あんたは白過ぎて前か後ろか分かんないよ。」
美紀は膨れて見せる。

「オレも暇があればまた走りたいんだけどな。まあ、高校時代は勉強しないと。」

透は中学校までは美紀と同じ陸上部だった。
今はこんな彼でも県大会まで行った中距離選手だったのだ。

「やっな奴。いつもトップの成績のくせにまだ勉強すんの？しかも高校って最近入ったばっかだし。」

今期に入って早々の試験でかなり下位だった美紀は声を荒げた。

「ひがむな。宿題写させてやるから。オレは頭が良い貧乏人だから、推薦で奨学金もらって国立大学に入らないと、他にオプションないしな。」

透は笑いながらサラリとシュールなことを言う。
自虐ネタか？

「なんか笑えませんけど。」

美紀は真っ黒な顔から目だけぎょろりと睨む。

透は首をすくめた。

「ごめん、つまんないこと言った。」

第3話

典型的な昭和な団地の二人の家は　階段を上がった踊り場を境に左右対称に並んでいる。
美紀がドアノブに手をかけると鍵が掛かっていた。
透は反対側のドアをさっさと開けて　じゃあ、と言って入ってしまった。

誰もいないのかな？

仕方なく合鍵で開けて入ると締め切った部屋から熱気が顔に当たった。
夕食がおいてある筈のダイニングテーブルにはメモが一枚置いてある。

「お父さんのお姉さんが亡くなりました。お父さんと二人で行ってきますので今夜は帰れません。
戸締りよろしくね。」

昨年から癌で入退院を繰り返していた伯母さんだ。
事情は分かるが・・・。

「私の夕飯より戸締りの方が大事か。」

美紀は汚れたシャツを脱いで裸になると風呂場に直行した。

ショートパンツにランニングTシャツだけ着て美紀は玄関のドアを

開けた。
こんな時は透のうちに行けば何か食べられる。
透のおばさんの車が駐車場にあるのは確認済みだ。
「ごめんくださ～い。おじゃまし ま～す。」
勝手にドアを開け返事も待たずに中に入った。
子供の頃からの習慣だ。
狭い家の中は締め切られてクーラーが効いている。
「うちの親がいなくって～。なんか食べるものありますか？」
６畳の畳の部屋にちゃぶ台を前に座り込んでいた透がいた。
彼も風呂上りなのか髪が濡れてランニングシャツにトランクスといういでたちだ。
いつものことなので、突然の乱入に表情も変えず答える。
「・・・カップラーメンで良ければ。」
「はあ？おばさんは？」
透は銀縁眼鏡の奥からジロリと睨んだ。
「あいにくおかあさんは今日は帰らない。ラーメンで良かったら勝手に作って食べてって。」
「え～！ご飯ないの？」
美紀は情けない声を出して座り込んだ。
透は黙って立ち上がって台所に立つと鍋に湯を沸かし始めた。
「ほら、出前一丁。文句言わずに食え。」

畳の上に大の字になって転がっている美紀に透は軽い蹴りを入れる。
参考書や辞書が散らばったちゃぶ台に、湯気の立ったどんぶりを置いた。

「も～シケシケじゃん。なんでおばさんいないの？車があるのチェックしてから来たのに。」

文句言いながらもズルズル音を立ててラーメンを吸い込む。
空腹には勝てない年頃だ。

ちゃぶ台の反対側に透は胡坐をかいて座った。
賢そうな白い顔が少し陰ったように見えた。

「最近時々帰って来ないよ。」

ラーメンをすすっている美紀の手が　それを聞いて止まった。

「何で？夜勤でもしてるの？」

透は言おうか言うまいか考えているように少し沈黙してから、低い声で言った。

「彼氏ができたみたい。結婚前提の。」

美紀はラーメンを噴出した。
透はそれを冷静に見つめる。

「・・・おい。汁が飛んだぞ。」

「ご、ごめん。だってさ。おばさん再婚するの？」

「まだ、わかんないけど。泊まってくるんだから　まあそのつもりかなあ。」

透は人事のように言った。

美紀はラーメンをがっついている場合で無い気がして箸を置いた。

「透は賛成なんだ？」

「・・・賛成も反対もないでしょ。所詮扶養家族だし養われてる限りは。」

透は少し笑った。

「だからさあ、この先どうなるか分かんないから準備だけはしとかなきゃって思うんだよね。

最近特に。

勉強だけでもできればまあ金のことでは迷惑掛からないだろうし。」

美紀はまじまじと透を見つめた。

「それで走るの辞めて勉強してるんだ？」

「・・・まあ優先順位から言ったら勉強の方が大事だからね。こっちはお母さんの再婚先次第で切羽詰るけど走るのはいつでもできるから。」

透は美紀の焼けた肌を眩しそうに見た。

「オレもかなり黒かったけど、お前はひどいなあ。でも、また一緒に走りたいな。」

「・・・透はえらいよ。自立しようと勉強してるんだもん。私なんか将来のこととか、勉強する意味なんて考えたこともないし・・・。」

「お前は走るの辞めるなよ。お前の走ってるとこハイエナみたいでカッコいいから。」

ハイエナ・・・？

「意味分かんない。せめてチーターって言ってよ。」

透は、あははと笑った。

「何かお前のイメージがハイエナなんだよ。チーターみたいに余裕ある感じじゃなくてさ。なりふり構わず獲物を追っかける、みたいな。必死な走り方がいい。」

「それを言ったらあんたが８００M走るときってインパラみたいだったよ。」

むくれながら美紀が反撃する。

「・・・せめてカモシカって言ってくれよ。」

透は苦笑した。

「いーや、インパラだったよ。あの走りは。必死に逃げてる感がさ。」

透は急に笑うのを止めた。
そして真面目な顔になって低い声でぽつりと言った。

「そうだね。オレはいつも走ってる気がする。追いかけるんじゃなくて逃げる為に。」

第4話

突然の詩的表現に、美紀は怒らせたのかと思い、透の横に座り直した。

「・・・ごめん。変なこと言った？」

透は少し笑って首を振った。

何故だか分からない。
美紀はその顔が泣いているように見えた。
両腕を透の首に回して顔を近づけると　唇を押し当てた。
透はしばらく眼鏡の奥の目を丸くして至近距離にある美紀の顔を凝視していた。
そのうち我に返ったように美紀の腕を掴んで顔を離した。

「・・・同情してくれたの？」
「・・・別に。」
「オレのこと好きだったの？」
「嫌いじゃないけど。付き合い長いし。」
「・・・オレ、初めてだったんだけど。」
「私も。」
「女の人って最初はこだわるんじゃないの？オレが相手じゃ・・・」
美紀はまだ喋り続ける透に抱きつくとその口に唇を再び押し付け黙らせた。

「・・・・。」
「グダグダうるさいな。私が相手じゃ不服？」

透は噴き出した。

「いや、光栄です。」

言うなり透の長い両腕は美紀の体を抱きしめた。
もう一度ゆっくりと口付けた後、美紀の首筋に彼の舌が這い、大きな手がランニングシャツの中に入る。
美紀の呼吸が荒くなる。
美紀の両腕が透の濡れた髪を掴んだ。
二人は絡み合ったまま畳の上に身を投げ出した。

何時間経ったのだろう。
髪を触る指の感触に気付いて美紀は目を開けた。
クーラーの規則的な機械音だけが狭い部屋に響いている。
窓の外はもう真っ暗だった。
美紀を片腕に抱いたまま、眠ってしまったらしい。
至近距離に透の白い横顔があった。
眼鏡を外して、髪が目に掛かっている透は　こうして見るとなかなかイケている。

美紀を抱きしめる体は痩せているが筋肉質で、陸上部で走っていた頃の面影はあった。
目を開けた美紀に気付いて、透は顔を向けるとそっと口付けた。

「透、私ね、いつも思ってた。」

突然話し出した美紀に、透は首を傾げる。

「透の走るところ、すごくきれいだった。身軽で自由で楽しそうだった。」

透は低い声で笑って美紀の頭を自分の胸に押し付けた。

胸の鼓動が美紀の頭の中に響く。

「・・・そうなりたいね。早く大人になって自由になりたい。」

「透？」

「・・・・。」

「泣いてるの？」

「・・・言うなよ。」

「お母さんの再婚が嫌なの？」

「嫌じゃない。でもそんなことで人生左右される自分の存在が情けなくて歯痒くて悔しい。」

美紀を抱きしめる両腕に力が入った。

「だから、早く一人で生きていけるようになりたい。だからオレ・・・。」

美紀の唇が言葉を遮った。

透の涙で濡れた顔にキスをする。

「透の準備ができるまで私待ってるよ。また一緒に走ろう。」

透は美紀の胸に顔を埋めた。
子供の頃のように美紀は透を抱きしめて髪をなでた。
彼のしなやかな肢体は本当にインパラのようだ。
この美しい獣がまた縦横無尽に走り回る姿を、美紀は見たかった。

第5話

透と母親が団地から引っ越したのはそれから僅か1ヶ月後のことだった。
母親の再婚相手の家で同居することになって団地を引き払ったのだ。
高校は引越し先の県の名門私立高校に編入したらしい。
お金があるだけじゃ入れない有名高校だと美紀の母親は溜息をついた。

あの夜から何となく美紀は透に会うのが気恥ずかしくて無意識に避けていた。
透もその気持ちを知ってか知らずか、鉢合わせしないようにしているみたいだった。
そのまま会わず仕舞で彼は引っ越していった。
美紀は何故だか怒りも悲しみも沸いてこなかった。
必ずまた逢えるという不思議な確信があったし、透の気持ちも手に取るように分かっていた。

引っ越してからたった二日目に美紀は透からの手紙を受け取った。

美紀へ

何となく合わす顔がなくて別れも言わずに引っ越してしまったことを謝ります。

僕は幼稚で弱みを見られて恥ずかしくなり君に逢うのが気まずくなってしまいました。

あの夜のことは同情でしてくれたことは分かってます。

でも嬉しかったです。

ありがとう。

僕が一人で生きていけるようになったらまた一緒に走って下さい。

山崎（旧姓　香坂）透より

それから6年経って美紀は２３才になった。
そのまま地元で就職してからは化粧も覚え、そこそこＯＬらしく見える。
透の噂は全く聞かなくなった。
時々近況を知らせる手紙が来ていたが、この1年くらいぱったりと止んだ。
だが美紀は不安はなかった。
むしろ再会の時が近づいているのを実感した。

そして1週間前。
久々に透から葉書が来た。
白い官製はがきに一言だけこう書かれていた。

美紀へ

期は熟した。１２時到着の新幹線で帰る。

美紀は葉書を握り締めた。

第6話

今、待ち焦がれた時が来ようとしている。
新幹線は美紀の目の前で止まった。
出口が開き中から人の波が先を争うように流れ出る。
美紀は流れに押されて立ちつくした。

人の波が改札口の向こうに流れた後、最後尾の車両から長身の男性が大きなリュックサックを肩に担いでゆっくり歩いて来た。
黒いＴシャツにジーパンが長身に似合っている。
美紀はそのまま動けなくなった。

見覚えのある銀縁の眼鏡を掛けた顔。
ただあの頃と違うのは、病的に白かった顔が日に焼けて健康的な褐色になっていた。
その顔が美紀を見つけると屈託なく笑った。

美紀の頬の涙がこぼれた。
６年ぶりに逢う透が美紀の目の前に立つ。

「久しぶり。」

「・・・うん。」

「オレ、就職決まって一人暮らし始めたんだ。」

「・・・うん。」

「親元離れたし、もう自分で人生決められるようになった。」

そういった透の顔は自信に溢れていた。
美紀は涙もぬぐわず眩しそうに見上げる。

「自由になったんだね。」

「逃げ切った感はあるね。インパラだけに。」

二人は笑い出した。

「お前はまだ走ってる？」

「インパラが来るのを執念深く待ってた。ハイエナだけにね。」

美紀は上目に透を睨む。
透は優しく笑った。
リュックを下ろすと美紀に右手を差し出した。

「これからずっとオレと一緒に走って下さい。」

第6話（後書き）

読んで頂きありがとうございます。
サイトがまだ使いこなせません。
編集にお見苦しい点がありましたら、もうスルーして下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6220n/

インパラの涙

2010年10月24日01時37分発行